

教員養成への一考察

—— 公立小中学校初任者研修教員への意識調査から ——

安原輝彦 埼玉大学教育学部 教育実践総合センター

キーワード： 公立小中学校初任者研修修了者、教職へのイメージ変化、教職に生きる経験等
教職を目指す学生へのメッセージ等

1. はじめに（問題の所在）

埼玉県の公立小中学校の新採用教員の初任者研修に関わっての研究も5年目を迎えた。⁽¹⁾ 初任者研修は、教育公務員特例法⁽²⁾で規定されている法定研修の第一歩であるだけでなく、本採用教員としての教職人生の第一歩を刻む研修でもある。もちろん、大学卒業後直ちに本採用教員として採用される者だけでなく、臨時的任用教員として、あるいは非常勤の教員として既に学校現場で経験を積みながら教員採用試験に合格して本採用となった者も少なくない。埼玉県の小中学校教員の場合、ここ数年は学卒者6割、既卒者4割の比率が続いている。

平成29年度からの公立小中学校初任者研修会に関わったこの5年間、初任者研修の初日での研修講師として参加し、そして、初任者として約一年を経た研修の最終回でのアンケート調査の実施を続けてきた。（令和2年度に関してはコロナ感染の状況から初任者研修も集合研修の機会は制限され、オンライン研修や自校研修の実施となったため研究の継続は出来なかった）

これらの研究に取り組む根底には、教育学部に入学して来た学生を将来の教師として養成するというミッションから教員養成事業スタッフの一員として、教員養成活動を担う一人のメンバーとして、どんな支援ができるのか、どのような貢献ができるのかという問題意識がある。というのも、教育学部である本学部では卒業生の教員就職率がここ数年の推移として5割前後（45%-55%）となっている現実がある。国立の教員養成大学・学部（教員養成課程）の令和3年3月卒業者の就職状況⁽³⁾の全国平均は59.0%であるが、同じ教員養成大学である本学部では46.0%と低い。卒業生の32.5%が民間企業、一般行政公務員として就職していく。ここ数年はこの傾向にある。

また、近年低下傾向にある教員採用試験の採用倍率に関して、実施状況を調査した文部科学省の分析によれば、中長期的なトレンドとして（1）大量退職に伴う採用数の増加による倍率低下。（平成12年度との比較から）特に小学校ではこの傾向が強い。（2）中学校、高校においては、一概に断定することは困難であるが、小学校に比して民間の採用状況に左右されやすいのではないかと指摘している。⁽⁴⁾ さらに、令和2年度に打ち出された、小学校35人学級の推進や小学校教科担任制の導入による教員需要の増加もあるのではないかと考えられる。今後しばらくは特に小学校教諭の不足が心配される。

本学部に目を向ければ、首都圏にある本学部は首都圏からの進学者も多く、教育学部以外に、経済学部、教養学部、理学部、工学部があり、サークル活動等での他学部学生との交流や多様なアルバイト先での経験から進路変更を考える学生がいることも当然考えられる。それにしても入学半年後の時点での進路調査で約85%の学生が教員を目指し、教員免許取得が卒業要件である本学部において、卒業時には教職を目指す学生が半数に減る実態をどのように受け止め、改善して

いくのか。確かにマスコミ報道で時折取り上げられる労働条件や労働実態など教職をめぐるさまざまな課題があるとはいえ、民間企業や一般公務員の環境において、働く厳しさや負担感、また、生きがいややりがいなど充実感において教職が群を抜いて厳しい職場であると比較できるデータはなかなか見当たらない。(個別職種、業種のデータはある)

教職は労働条件や労働環境も厳しく、生きがい、やりがいを搾取された、いわゆるブラックな職業なのだろうか。まずは学生から教員になった1年目、あるいは、既卒して数年間の経験の浅い初任者にとって、教職生活における初任者という位置で労働の実態や職場環境についての意識がどう変化したのか、について実際に教員1年目を経た初任者の声を集めることにした。彼らの声の中から、大学の教員養成に活かせるヒントはないかを探りたい。

2. 研究の目的

本研究は埼玉県教育委員会が行う公立小中学校の初任者研修会に参加した初任者を対象としてアンケート調査の結果をもとにしたこれまでの研究の流れを引き継いで行ったものである。本年度については、特に、「教職イメージ」に焦点を当て、初任者という本採用教員としての教職生活のスタートを切った最初の1年間の教職経験を通して、教職に就く以前の学生時代における教職という職業のイメージと、実際に教職に就いて1年間を経た初任者の段階での教職という職業のイメージに対する相違や変化をとらえることで、教員養成の学部段階でどのような学びや教職への構えが有効であるかを探るものである。

3. 研究の方法

初任者として1年間の教職生活を経て「教職に就く以前の学生時代における教職という職業のイメージと、実際に教職に就いて1年間を経た初任者の段階での教職という職業のイメージの相違が感じられるのか」を問う意識調査が中心である。

また、「教員としての不安」については初任者研修の第1回スタート時点(4月)と初任者研修の最終回時点(2月)についてアンケート調査を実施し、1年間の「教員としての不安」の意識の変化についても調べてみた。

なお、新型コロナウイルス感染症の状況から、初任者研修の第1回については、オンデマンドによるビデオ研修であり、初任者はそれぞれの所属校で動画ビデオを視聴した。初任者研修会の最終回は、対面の集合研修であったが、全体を4つの集団に分けて4日間の日程で行われた。最終回のアンケートはそれぞれの集合日程での研修会修了後に、第1回と同様、各自がグーグルフォームアンケートにアクセスしての回答を得たものである。

したがって結果として第1回のアンケート回答者数と最終回の回答者数には開きがあるのはオンデマンド研修と対面研修での研修会の集合形態の違いによるところではないかと考えられる。

4. 調査内容と調査結果

対象者…令和3年度小中学校初任者研修会名簿掲載者 961名(小学校 582名、中学校 379名)

4-1 【第1回研修会調査】 回答数 274名(回答率 28.5%)

調査内容

- (1) 所属 小学校教諭 156名 (回答率 26.8%)
 中学校教諭 118名 (回答率 31.1%)

- (2) 臨時的任用経験 (6か月以上)

表1 臨時的任用教員経験の有無

臨時的任用経験	ある	無い
小学校 156名	66名 (42.3%)	90名
中学校 118名	85名 (72.0%)	33名

- (3) 教員を決意した時期 【小 中 高 大 大学卒業後】 小中合計 274名
- 小学校時代 57名 (20.8%)
 中学校時代 76名 (27.7%)
 高校時代 60名 (21.9%)
 大学時代 60名 (21.9%)
 大学卒業後 21名 (7.7%)

- (4) 教員を選択した動機 1つ選んでください。

ア 児童生徒と活動する楽しさや共に成長できる魅力から	74名 (27.0%)
イ 教育実習や学校現場での体験から	32名 (11.7%)
ウ 良き恩師との出会いから	126名 (46.0%)
エ 公務員としての安定感から	8名 (2.9%)
オ 家族、知人の影響から	17名 (6.2%)
カ 第1希望ではなかったが、進路の一つではあったため	4名 (1.5%)
キ 特に希望はなかったが採用試験に合格したので	4名 (1.5%)
ク その他	9名 (3.3%)

- (5) 教員としてスタートしたが、次の項目で特に強く不安に思っていることを3つ選んでください。

(1) 教科指導や授業指導での指導内容の知識・理解	107名 (37.1%)
(2) 教科指導や授業指導での指導方法や子供への対応	141名 (51.5%)
(3) 児童生徒との人間関係(コミュニケーション)の構築	53名 (19.3%)
(4) 先輩教員や同僚教員との人間関係(コミュニケーション)の構築	64名 (23.4%)
(5) 保護者との人間関係(コミュニケーション)や連携	137名 (50.0%)
(6) 学級経営や学級指導	131名 (47.8%)
(7) 道徳や特別活動などといった領域の指導	56名 (20.4%)
(8) 不登校、非行問題行動等の生徒指導上の課題への対応	56名 (20.4%)
(9) クラブ活動、部活動の運営	29名 (10.6%)
(10) 困ったときや悩んだときに相談できる人や機関に頼れるか	15名 (5.5%)
(11) 生活管理や健康管理	31名 (11.3%)

4 - 2 【研修会最終回調査】 回答数 643 名（回答率 66.9%）

調査内容

- (1) 所属 小学校 358 名（回答率 61.5%）
 中学校 285 名（回答率 75.2%）

- (2) 臨時的任用経験（6 か月以上）

表 2 臨時的任用教員の経験の有無

	ある	無い
小学校 358 名	181 名 (50.6%)	177 名
中学校 285 名	206 名 (72.3%)	79 名

- (3) 初任者研修の修了時を迎え、約 1 年を経た現在も、次の項目中で不安に思っていることを 3 つ選んでください。

- | | |
|-----------------------------------|---------------|
| (1) 教科指導や授業指導での指導内容の知識・理解 | 284 名 (44.2%) |
| (2) 教科指導や授業指導での指導方法や子供への対応 | 311 名 (48.4%) |
| (3) 児童生徒との人間関係（コミュニケーション）の構築 | 80 名 (12.4%) |
| (4) 先輩教員や同僚教員との人間関係（コミュニケーション）の構築 | 110 名 (17.1%) |
| (5) 保護者との人間関係（コミュニケーション）や連携 | 246 名 (38.3%) |
| (6) 学級経営や学級指導 | 353 名 (54.9%) |
| (7) 道徳や特別活動などといった領域の指導 | 315 名 (49.0%) |
| (8) 不登校、非行問題行動等の生徒指導上の課題への対応 | 277 名 (43.1%) |
| (9) クラブ活動、部活動の運営 | 105 名 (16.3%) |
| (10) 困ったときや悩んだときに相談できる人や機関に頼れるか | 58 名 (9.0%) |
| (11) 生活管理や健康管理 | 83 名 (12.9%) |

- (4) 実際に教員になってみて、大学時代に予想（イメージ）していた教員像や学校像のうち次にあげる項目で実際には大きく異なっていた点があれば指摘してください。（①子どもたちとの関係 ②教員同士の関係 ③保護者との関係 ④地域との関係 ⑤生活の安定 ⑥勤務時間や働き方改革 ⑦その他） *番号の選択だけでなく記述がある回答をできるだけ取り上げた

(4) - 1 【小学校】複数選択

- ① 子どもたちとの関係 26 名

- ・大学時代はもっとフランクな関係だと想像していたが、児童は思っていた以上に「先生」という存在に絶対的な気持ちを持っていると感じた。
- ・信頼関係作りが必要になるということである。
- ・関わり方や声掛けの仕方が難しい児童が思っていたよりも多い。ケンカの解決にかなり時間がかかる。

・休み時間に一緒に遊んだり全員に関わったりする時間の確保が難しい。常に生徒指導や丸付けに追われている。

・子どもたちとの関係は楽しくかかわったりするだけでなく、生徒指導や成績などかかわるうえでも様々なことをみとらなければいけないところが大変だった。

・子どもたちは想像以上に自分たちでやっていく力があるということ。

・子どもの実態、子どもを取り巻く環境、自分が子どもの頃との違いが大きい

・子供が思っていたよりも素直だった。

・思っていたより子供は子供らしい。

・児童の理解度は本当に人それぞれだということを感じた。多くの教え方の引き出しが必要であると思った。

・素直で一生懸命な子が多く、よい働きかけをすればよい行動が返ってくる。その一方で、指導の一貫性が崩れると、雰囲気が悪くなるということ。

・様々な児童がおり、学級経営が想像以上に大変だった。

・子どもたちとの関係づくりでの言葉選びや対応などを考えをもって行うことの重要性

・子供たちの考え方や価値観の違いに戸惑ったことはあります。

② 教員同士の関係 41名

・当たり前ではあるが、自分では思いつかないようなやり方をたくさんお持ちで、そのやり方を知るとはとても楽しい。

・誰にどんなことを相談・報告すべきなのか、判断が難しい。

・学級のことに関しても、他の先生方が一緒に対応してくれてよかった。教員同士のコミュニケーションも多く、学年等を越えて話をすることも多かった。

・人によってはパワハラが当たり前にあるということ。

・よくも悪くも子供のような人がいた。

・先生方は余裕がなく親切にしてもらおうと逆に申し訳なくなる。

・教員同士のつながりがとても重要であること

・1年目はいろいろなことを教えてくれるからとにかく吸収して、と大学時代先輩から教わっていたが、実際先生方も忙しい中で1から教えてはもらえなかった。自分から学ぶという姿勢の必要性を痛感するとともに、学校によって実情は異なると思うが、「分からないことが分からない」初任者をサポートできる体制がもっと必要だなと感じた。

・思っていたより優しかった。

・みんな協力しながら仲もよいものかと思っていたが、教員の中で仲の良い人で固まっているときがある。

・温かい関係性があると想像していたが、希薄で悪口が多いと感じる。

・温かい雰囲気の職員室だった

・学校によって教員同士のかわり方が大きく異なる点

・教員同士、学年間や学校間で資料や教材の共有があまりなかったことが予想と異なった。同じことをやるはずなのに、それぞれが用意をイチからすることはクラス間の

差が出るので、初任者の自分としては心配があった。

- ・私の学校は穏やかですごく居心地が良いです。しかし、話によると数年前や、他校では先生方の関係が良くなかったなどのお話もお聞きします。先生方は仲が良く明るくお仕事をされているイメージだったので、すごく驚きました。そういった職場に身を置くこともあるのだと少し覚悟をしています。

- ・教員同士の関係は大きくちがいました。職員の連携ができていないと、教育活動がうまくいかないことがありました。先輩とのコミュニケーションは大切だと思います。

- ・教員内で派閥があって困惑した。

- ・思っていたよりも、初任者いじめに会わなかった。

- ・職員室が殺伐としている

- ・同じ職場内の先輩の先生方でも様々な考えや思想があり、若干の派閥のようなものを感じた。

- ・様々な性格の先生方がいるのだと実感した。様々な先生方の意見を聞き、折り合いをつける難しさ。

③ 保護者との関係 39名

- ・保護者と学校が互いに協力して子どもを育てるという意識よりも、学校は保護者の言うことを何でも聞いてくれるところ、という印象の方が強い。家庭学習で学ぶべきことと学校教育で学ぶべきことの線引きが曖昧になっている。

- ・教員と児童だけではなく、保護者は何を望んでいるのかを考えることも重要なのだと知ることができた。

- ・対応の仕方が何もわからない。連絡帳の対応や、どんなことで電話対応が必要なのか、など。

- ・温かい保護者の方が多かった。保護者の方と連絡をする機会は予想より多かった。

- ・保護者の支援、指導が必要に感じる。母親を孤独にさせる父親への子育て参画講義。小学校の男性教諭はとても良いお手本だと思う。(一緒に子育てしている先生。奥さんを思いやる先生が多い) 児童以上に保護者に課題があるのに、教育委員会や行政の方々が保護者の言いなりになってしまう印象 (特に保育課も)

- ・保護者は敵ではなかった。

- ・自分の伝えたことが大きな誤解を招くことが多く言葉選びに慎重になった。

- ・保護者が「お客様」のような感じで、学校に求めることが想像よりもとても多いと感じた。

- ・学生時は保護者は見守るというイメージが強かったが家庭との連携が子どもたちの指導や成長に深く大きく関わることを知った。

- ・関わり方に関わり注意しなければいけなかった。

- ・勤務時間外の電話のやり取りや連絡帳でのやり取りが多く、子どもたちとの関係よりも保護者との関係づくりに悩むことが多かった。

- ・自分の思いと言わなきゃいけないことは別である時がある。

- ・保護者が学校に求めることが多い。

- ・想像以上に自分の子供を理解している保護者が少なく、うちの子は悪くないとい

う保護者が多い。モンペが多いというイメージはあったが、それを上回る。

④ 地域との関係 11名

- ・地域との関係もイメージしてよりもずっと深く、周辺に住んでいる方の理解や協力がとても大切だと感じた。
- ・思っていた以上に地域との協力が必要である。
- ・コロナ下のためかあまり関わる機会はなかったように思った。あいさつや登校指導の手伝いなど毎日のようにしてくれた。落とし物を届けてくれたり、色々なところで協力をしてくれた
- ・地域との関係というよりも、勤務地によつての地域ごとの差がイメージよりもおおきかったです。
- ・コロナ化で地域との関わりが薄いように感じた。
- ・コロナ禍であるため地域との結びつきが少なくなっている
- ・地域との関係 かなり地域と根強く、連携していることが良い意味で予想と大きく異なっていました。
- ・地域の方との繋がりが深く、地域の方主体のイベントが多かった。子供たちは楽しめていたが、勤務時間外の準備や手伝いなどの業務に追われることもあった。

⑤ 生活の安定 13名

- ・帰宅が遅くなり、どうしたら自分自身の身体・精神の健康を保てるのかを考えさせられた。
- ・私的な時間でも、教育公務員として生活をする心構えの必要性を感じた点
- ・「仕事によるストレスのため、子どもができづらい(不妊)。仕事の負担を減らすか、より時間の余裕が取れる職業への転職が妊娠への近道」との旨の話を、医療機関から受けてしまった(妻も私も)。
- ・東部地区にある自宅から南部地区にある職場までが遠く、それも仕事以外のストレスになっていた。

⑥ 勤務時間や働き方改革 161名 (この項目については、共通する代表的な記述を取り上げるが、記述をした者(55名)の約9割は長時間労働や多忙感を感じている記述が目立った。)

- ・勤務開始時間前に子どもへの対応が必要な時点で、時間外労働を強要されていると感じる。「やりがい」で教員のモチベーションを維持するにも限界がある。業務の分担が適切でなく一部の教員に負担が集中している。教育者としてやるべき仕事以外にもやる事が多く、教育活動に専念する余裕がないことが悔しい。
- ・子どもたちが下校してからやること(会議、事務作業、学年・学級事務、授業準備など)が多く大変だった。
- ・「これ必要?」ということが多い。例えば、朝のお茶くみ、内容のない会議、同じことを2回行う校内研修。また、教材が昨年度のものが残っておらず、1から作るようになってしまい、働き方改革から遠い気がする。教員の仕事量が多すぎて、勤務時間

内には絶対に終わらない。終わらないどころか、1日11時間勤務が普通である。一般企業だと、マスコミに取り上げられてしまう残業時間で普通に過ごしていることがおかしい。学校全体で必死に、削減しようとしていないところが不満である。

- ・圧倒的に仕事が終わりません。優先順位が訳わからず、定時後に学年会、その後に学級事務（授業準備）などを行います。勤務開始時刻前に子供が登校してきたり、あいさつ運動、学校公開の資料作りなど。DXを全県で推進し、増やすのではなく、仕事を減らす仕組みを作っていただきたい。

- ・人によってそれぞれ勤務時間がバラバラである。不平等に仕事が割り振られているのか、責任が多すぎて膨大な仕事量の人なのか分からない時がある。

また、勤務時間過ぎた後に次から次へと思い出すように仕事を振ってくるので終わりが見えません。

- ・働き方改革とよく言われているが、実際には人員も足りず、一人当たりの負担が大きい。教頭や教務主任、学年・教科領域の主任の負担が特に大きいと感じる。時間で学校を閉める等の取り組みもあるが、実際には持ち帰りの仕事や休日出勤が増えるばかりである。教師の魅力を伝え、よい人材を呼び込むことが今後の働き方改革につながっていくのではないだろうか。（指導法やデータの共有・引継ぎ、教職員が協力して指導計画をたてることや指導にあたることも必要。）

- ・人によってそれぞれ勤務時間がバラバラである。不平等に仕事が割り振られているのか、責任が多すぎて膨大な仕事量の人なのか分からない時がある。

また、勤務時間過ぎた後に次から次へと思い出すように仕事を振ってくるので終わりが見えません。

- ・定時に帰れる日は基本的にない。本校で働き方改革の一環として行われている「ノー残業デー」については、「学校から追い出される日」のような認識であり、業務時間の削減とそこから生まれる教材研究等の時間の創出に必ずしも繋がっていない。

- ・働き方改革とはいうものの、勤務時間外での勤務が当たり前のように行われている。ベテランの先生方が当たり前のように20時ごろまで残業をするため、若手は帰りづらい。時間外勤務に対する意識の違いが、年代や年齢によって大きくずれていると感じる。若い世代の先生方は残業に対してあまり良くないイメージを持っていると感じる。しかし、ベテランの先生方は残業を当たり前と思っている人が多いように感じる。この考え方の差を埋めることが大切だと感じる。

- ・勤務時間や働き改革により帰りやすい職場だと感じるが、授業の準備やその他業務がギリギリになってしまうことがありました。授業の準備ができる時間が確保できると感じていたがこの部分に差があった。

- ・学生のころからある程度覚悟はしていたが、想像以上の激務と多様なスキルが必要なことから、担任をする前にある程度の研修期間をいただきたいと強く思う。特に、臨採経験のない初任者は、4月に何も経験がなく、スキルのない状態で学級担任をし、様々な業務をこなすのは、本当につらく大変だった。休日にある程度自己研鑽ができる人でないと、潰れてしまうとを感じる。4月は研修期間とし、担任は5月からや、副担任を経験してからといった取り組みをしていただければ幸いである。

- ・仕事量、残業時間は即違法レベルだと感じる。転職も検討したが、ボランティアだ

と思い今年度は取り組んだ。

・勤務時間の中で全ての業務を果たすのは難しいが、だんだん慣れてくるということ。管理職の先生方からの支援が温かいということ。

・仕事が勤務時間には到底終わらない量で、想像よりもはるかに大変だと感じた。ただ、管理職の先生方が、帰りづらくないように初任者でも早く帰れるような声かけをしてくださったので、とても感謝しています。

・もっと残業が多いと思っていた。しかし、自分とはもかく周りの先生は早く帰っていてびっくりした。

・働き方改革を意識して、勤務時間の短縮や休暇をとりやすい環境でありがたいと思った。

⑦ その他 11名

・教科指導よりも雑務の量が多くて、様々なことを同時進行で器用にこなさなくてはいけないこと。

・指導内容や指導方法、評価について。私は約10年前に教育学部を卒業し、民間企業での勤務経験を経て教員になりました。そのため、学習指導要領の改定や、GIGAスクール構想、不登校生徒の急激な増加など、予想していたものと異なっていました。

・教科指導や生徒指導だけでなく、事務的な作業も多い

・普通学級内でのADHD傾向がある生徒の割合が高い

・自費で教材、教具を買うことが意外と多い。

・特別支援教育については大学時代に学んでいましたが、実際がどのようになっているのかはわかりませんでした。特別支援学級の担任になって、児童の特性に合わせて学習指導を行うことがよいということがわかりました。また、特別支援学級の中だけでなく、通常級との交流を行うことが大切であると学びました。

・大学の時は十分に時間をとって1つの授業の準備をする教育実習や模擬授業があったが、実際は他の職務もあり限られた時間でできるだけ、合理的に教材研究をしなくてはいけない。授業にねらいを持ち、細部にこだわるのではなく単元全体の大きな流れを踏まえて研究しなくてはいけないと、今では感じている。

・勤務時間の前から朝運動があったり、退勤時間のめいっぱいまで研修があったり、この時代でも噂に聞くブラックなところはこんなに残ってるんだなと思いました。

・大学では、ICTを使つての授業について学んでいなかったもので、現場とのギャップはとても感じた。

・学校によっては古い習慣が残っている。初任者は朝早くに来る事が当たり前の雰囲気。(朝のお茶出し等)定時で帰ることがまず不可能。仕事が膨大すぎる。働き方改革に逆行している。(臨任でお世話になっていた学校では、職員の健康を第一と考え、働き方について日々変化があった。)

・教科担任制が想像よりも進んでいないと感じた。

(4) - 2【中学校】複数選択

① 子どもたちとの関係 19名

- ・子どもたちとの関係では、生徒によって距離感に差があることが大きかった。
- ・子どもたちはイメージより、ずっと優しくいい子たちです。
- ・子供たちとよい関係をきづきたいと思っており、距離が近くになり、生徒から慕われることがよい先生というイメージをもっていたが、生徒が成長できる環境をつくること、先生と生徒に程よい距離感を持つことが大切と感じた。
- ・生徒指導や教育相談は実際の事例に立ち会わないとわからないことが多くありました。大学の講義で取り扱うのは難しいとは思いますが、教職課程の中で最近の実践例を学べる機会があれば、教員になる際の心構えができ、職業へのイメージギャップが少なくなると思います。
- ・想像以上に子どもたちの性格などが違う。
- ・些細なことでも子どもの心を大きく傷つけてしまうことがあるということ。どんな細かいことでも教員間で情報共有をすることがとても大切とだということ。
- ・子どもたちとの関係が私が中学生だった時と変化していると感じた。

② 教員同士の関係 45名

- ・思ったよりアットホームでした。
- ・個性的な人が多い。先輩教員が怖い。指導が雑。管理職にやめたら？といったような言葉をかけられた。
- ・本当に様々な人がいる。意地の悪い人がいて日々恐怖を感じている。
- ・もっと互いに高め合う関係かと思っていたが、あまり刺激し合わないことの方が多い。
- ・学級担任は1人でクラスを支えていくものだと思っていたが、学年職員の先生方がサポートしてくださり、協力し色々学びながら学級経営を行うことができた。
- ・学校によって、教員同士の関係性が違う。臨時的任用で1年ごとに異動していたときに、職員室の雰囲気差があることに対して驚いた。
- ・学年ごとに独立していて他学年との交流がない。管理職は職員を守ってくれない。
- ・教育公務員だが、今年の学校は暴言や誹謗中傷をいう方もいる
- ・教員同士の関係について、実際に働いてみると、報告、連絡、相談が大事であることが改めて分かった。
- ・教員同士の関係は職場によって全く異なることが臨任での経験で複数校経験したことによって感じました。
- ・子どもには人間関係の大切さを指導しているのに、教員同士の人間関係は仕事上、重視されていない。民間企業ならチームワーク研修が徹底してあるのに、学校現場ではなく野放し。公務員は意識が薄いのだなと痛感する。
- ・思っていたよりも遥かにギスギスしている印象があります。また、陰口が多く自分も帰った後言われているんじゃないかと思えます。もう少し子どもたちのことで悩む仕事と思っていただけに残念でした。
- ・所属校によって異なるとは思いますが、学校全体で仲が良くチームワークが図れている場合と学年内の連携が厚い場合と、個々の活動の中で助け合っている場合がある。学校全体で高め合える職場づくりを進めていかなければならないと実感した。

- ・先輩教員のわがまま。
- ・他の先生方もお忙しい中、お時間を作ってお話をしてくださったり、相談に乗ってくださったりすることが多く、学生だった時以上に、チームワークが厚い職業だと思いました。
- ・同僚はフレンドリーだったこと
- ・予想していたよりも教員同士の結びつきが強く、しっかりと連携がとれている。安心して1年間を過ごすことができた。
- ・教員同士の関係。頼れる先生方はたくさんいるが、主任や管理職には頼れない。意見を出しても受け入れてもらうことが少なく、無視されることもある。ただ、周りにはいい先生方ばかりで、助言をいただいたり、話を聞いてくださったりと、学ぶことはたくさんあるのでそれで十分だと思っている。
- ・教員同士では、特に、所属学年の教員とは人数が少なければ少ないほど、関係が密になるため、大学時代、臨時的任用時代を含めてイメージとは異なっていた。私自身、もう少し助けてもらえるものだと思っていた。だが、自らヘルプを出さないといけないということを痛感した。実際、昨年11月から12月いっぱいまで適応障害で病休に入っていたが、病休が明けた現在でも、学年の教員とはうまくいっている気がしない。
- ・良いイメージばかりあったわけではないが、決まった人に仕事が任せられていたり、連携を取りたいと思う人とそうでない人がいたり、マイナスなことを言っている人がいたり教員同士の関わりが1番疲れてしまう。この仕事を辞める理由になり得ることだと思う。

③ 保護者との関係 19名

- ・中学校なので、ある程度親も子供の自主性を尊重するなどしてそこまで口出しをして来ないかと思っていたが、中学生でも子離れできていない親や、過保護ではないかと思われるような言動の親が多く驚いた。
- ・保護者との関係は思っていたより良好である。

④ 地域との関係 10名

- ・想像していたよりも、地域の方々に支えられていることを実感している。
- ・思っていたより、地域と関わるが多かった。
- ・思っていた以上に関わるのが少なかったように感じた。

⑤ 生活の安定 7名

- ・収入は安定しているが、拘束時間がとても長い。よって、教員以外の職についている友人と会う機会は減る。給食があるおかげで栄養バランスは崩れにくい、基本早食いなので健康に気をつけたほうがいい。
- ⑥勤務時間そのものは問題ないし、手続きを踏めば必要な休暇は取れる。(拘束時間は長いけど)
- ・やることがとても多く、自分のプライベートの時間を削って働かなくてはいけないときがある。しかし、その頑張った分、生徒が喜んでくれて、やってよかった、と思

えるのも事実ではある。勤務時間を気にしては教員はできないと思うが、教員にとって勤務時間や働き方改革というのは難しいものなのではないかと感じる。もちろんなるめく時間がかからないよう、効率よく仕事をしようとは思っているが、なかなかそうはいかないのが現実。

・病休の期間は給料がカットされると思っていたが、満額だったことに驚き、賞与も出たので、そこは驚いた。

⑥ 勤務時間や働き方改革 107名（この項目については、共通する代表的な記述を取り上げるが、記述をした者（40名）の約9割は長時間労働や多忙感を感じている記述が目立った。）

・勤務時間は思っていたよりも長く感じた。だが、やりがいを感じていれば感じられるほど、勤務時間は特に考えて働くことはないのだと感じる。働き方改革は、始まっているように思えたが、勤務時間などの短縮といった、目に見えるものばかりで、実際の教師の負担軽減にはつながっていないと感じた。特に、GIGAスクール構想の影響で、タブレット端末が一人一台になってから、業務負担が減った面もあるが、操作方法や新たな生徒指導案件などがあり、結果的には勤務状況は苦しくなっているようにも感じた。

・勤務時間に関しては、長時間アルバイトをしていても大丈夫だったので甘く見ていましたが、気を張る仕事なので帰れないのはかなり辛いです。しかし先輩の先生方は早めにお帰りになるので、最初のうちだけだと思います。

・一生懸命仕事をしてる方が良いという風潮があって、ある意味予想通りだった。
・働き方改革が部活を削ることに向かっているため、逆に子供達のエネルギー発散場所が減りトラブルになっている。部活指導があるからこそ元気に生活している子供達の居場所が減っている。

・定時はありますが形だけという意味に近いように感じています。部活動は勤務時間外に行われるのが当たり前なので、夏場等は18:00完全下校後、欠席者への連絡や授業準備等を始めます。勤務時間内では終えることのできない仕事内容のため、経験の浅い自分はひとつひとつに時間がかかってしまい、帰宅時間がかなり遅くなるのが続いています。毎月の時間外も多くなり、面談をして応援してもらいますが現状をすぐに変えることができません。体調を崩さないように自分に出来ることを日々努力していこうと思っています。

・仕事として考えたら働いてもらえない。趣味だと言いついて聞かせて、生活のすべてを犠牲にしないと成り立たない業務。いつか普通の仕事として存在する仕事に教育の現場がなってほしい。8時間勤務、完全週休2日は守られてほしい。労働基準法はどうなっているのでしょうか。

・管理職を中心に時間外労働の削減を呼びかけられるが、業務内容の改善や変更が行われていないので形骸化している側面があること。

・「働き方改革」という名ばかり、学校生活で耳にするが教育活動において働き方改革だと感じる事がほぼない。スクラップアンドビルドではなく、ビルドアンドビルドだと常に感じている。部活動での対応ばかりでなく、今はコロナの対応であったり

と教材研究を行う時間が全くなく、唯一の休日である日曜日にも学校に来て、授業準備をしていることが現実である。自分の時間が確保できない。勘弁してほしい。

・教員は私が想像していた以上にキツく、残業もたくさんあると思っていましたが、実際は生徒との関わりが楽しく、そこまで残業がないことがわかりました。

・学生時代は教員は、「子供のために何でもやるのが当たり前！」というイメージを持っていました。なのでサービス残業当たり前で毎日夜の8～9時は当たり前、土日でも部活動で休みなしというイメージを持っていました。しかし教員に正式採用されてから働き方改革、超過勤務原則月45時間以内、部活動ガイドラインの遵守など少しずつ教員が健康で安全な働き方になっているなど感じたことです。

・勤務時間や働き方改革が内側からは何もなされていないことを改めて知りました。部活動は顧問の先生方によって具合が違うと思います。部活は大切だと思いますが、教師が土日をつぶしてまで行うことではないと思います。どうか、若い先生が困らない部活動のあり方が広がっていけばな、と思います。

・勤務時間に対する意識の低さを感じられます。定時過ぎても残っている先生方が多すぎると感じています。業種にもよるのだと思いますが、学生時代のアルバイトをしていた会社では、正社員、パート、アルバイト関係なく、勤務時間前、勤務時間後に職場にいると管理職から怒られていました。管理職の意識が変わらない限り、現状は変わらないと思います。

⑦ その他 4名

・教科指導よりも雑務の量が多くて、様々なことを同時進行で器用にこなさなくてはいけないこと。

・指導内容や指導方法、評価について。私は約10年前に教育学部を卒業し、民間企業での勤務経験を経て教員になりました。そのため、学習指導要領の改定や、GIGAスクール構想、不登校生徒の急激な増加など、予想していたものと異なっていました。

・教科指導や生徒指導だけでなく、事務的な作業も多い

・普通学級内でのADHD傾向がある生徒の割合が高い

(5) これから教員を目指す大学生に、大学時代に学んでおくことや体験・経験を書いてください。(メッセージでも構いません)

* 回答者643名が全員この「5」の設問について回答している。そこで、ここでは、特に、「4」の質問である大学時代の予想イメージと実際初任者として勤めた1年間でのイメージで大きく異なっていた点①～⑦の項目のうち最も回答数が多かった⑥「勤務時間や働き方改革」を選択した小学校161名、中学校107名の中から、実際に負担感や長時間労働を記述し、訴えた者がどのようなメッセージ等を取り上げたのかを中心に拾い出してみる。

(5) - 1【小学校】161名の中から

表3 これから教職を目指す大学生へのメッセージ(小学校教諭から)

<p>⑥ 「勤務時間や働き方改革」についての記述</p>	<p>大学時代に学んでおくことや体験・経験メッセージ等</p>
<p>教育実習先の学校では、17:30～18:00頃に帰る教師が多かったので、自分もそうなると思っていた。毎日20:00前後の帰宅になることに辛さを感じている。何を行うべきで、何を切り捨てるべきなのか、明確な基準が設けられ、無駄な仕事の整理が行われてほしいと感じる。私自身も、仕事の処理能力を向上させ、学校にできるだけ残らないよう、心がけたい。</p>	<p>大変なことも多いですが、やりがいを感じる部分も多くあります。子供が好きで、教えることが好きなら是非に。大学時代は、とにかく悔いのないように学び、遊んでください。時間の融通が効きやすく、何事も挑戦しやすい時期だと思います。社会人になると、あそこまでの時間的・身体的余裕はなくなります。(初任者で慣れないことばかりなのでそうなるのかもしれませんが・・・笑) 目一杯、様々なことを経験してください。それが、仕事に活かされると思います！おすすめは、ブラインドタッチとパソコン操作！今早く打てなくて本当に困ってます・・・やっておくといいですよ。</p>
<p>大学時代は教科指導、生徒指導、保護者対応くらいしか考えていなかった。統計、通知表、要録等の事務作業の多さ、教材費等の会計作業、コロナウイルス対応など多岐にわたった。その中でどのように自己研鑽に励めばいいのか悩んだ。</p>	<p>毎日忙しいですが、やりがいを感じる時がたくさんあります。子どもの成長した場面に出会えるのが一番。子どもと遊んでいるとき、ふざけた話、まじめな話をしているときなど書き出したら切りがありません。とても魅力的な仕事だと思っています。教員になりたいと思った理由や自分の理想の教師像を「具体的に」「強く」持つておくことが大切だと思います。</p>
<p>大学時代から仕事量が多いと覚悟はしていたが、想像以上に仕事が多く、定時出勤退勤はできなかったことがない。</p>	<p>大学時代は、今後同じ教職に就く人たちとの交友関係を広げておくといいと思います。このご時世なので、初任者同士で集まる機会があまりなく、一人で苦しい思いをしていると思う時期がありました。しかし、大学時代の友人と集まったり、SNS で会話したりすると、みんな同じような悩みを抱えているとわかり、一気に気が楽になりました。卒業から約1年経つ今でも、頻繁に連絡をとれる友人がいることは、私の支えになっています。</p>
<p>「これ必要?」ということが多い。例えば、朝のお茶くみ、内容のない会議、同じことを2回行う校内研修。また、教材が昨年度のもの</p>	<p>子供と関わるだけでなく、様々なことに興味をもっていることが、子供や保護者、同僚とのコミュニケーションをとっていく</p>

<p>が残っておらず、1 から作るようになってしまい、働き方改革から遠い気がする。教員の仕事量が多すぎて、勤務時間内には絶対に終わらない。終わらないどころか、1日11時間勤務が普通である。一般企業だと、マスコミに取り上げられてしまう残業時間で普通に過ごしていることがおかしい。学校全体で必死に、削減しようとしていないところが不満である。</p>	<p>上で大切です。なので、視野を広げることをすれば良いと思う。また、周りに助けを求められるようになっておくことが大切です。</p>
<p>特に初任者はやることが多く、帰れない。</p>	<p>辛いことがあっても、助けてくれるのは子どもでした。また、今年度はあまり交流ができませんでした。同じ立場の同期がいると考えると頑張ることができました。</p> <p>大学時代に学んでおくことは、自分の興味のあることを深く追求することだと思います。必ず自分の強みになると思います。</p>
<p>圧倒的に仕事が終わりません。優先順位が訳わからず、定時後に学年会、その後に学級事務（授業準備）などを行います。勤務開始時刻前に子供が登校してきたり、あいさつ運動、学校公開の資料作りなど。DXを全県で推進し、増やすのではなく、仕事を減らす仕組みを作っていただきたい。</p>	<p>試験勉強だけではなく、実際に授業をするイメージを持って書籍などで勉強をしておいた方がいいと思います。後、パソコンを上手に使える人が圧倒的に少ないので、ICTを使いこなせるだけで重宝されます。</p>
<p>勤務時間などはイメージ通りではありましたが、まだ自分が大学生の頃は働き方改革という言葉があまりなかったように思います。自分が効率よく働けばもっと勤務時間も短くなるとは思いますが、現状では意識していても勤務時間内に終わらせることは難しいと感じています。</p>	<p>机上での勉強ももちろん大切ですが、わからないことを質問すること、それをいかに自分の力に変えられるかがとても大切になってくると思います。一緒に働く先生方とのコミュニケーションを上手に取ることで、同じ環境でも働きやすくなると思います。そのようなコミュニケーション能力を大学までに学んでおくともとてもいいと思います。</p>
<p>人によってそれぞれ勤務時間がバラバラである。不平等に仕事が割り振られているのか、責任が多すぎて膨大な仕事量の人なのか分からない時がある。</p> <p>また、勤務時間過ぎた後に次から次へと思いつくように仕事を振ってくるので終わりが見</p>	<p>子供を育てるために、授業で勝負し、信頼関係をすぐに築き上げること</p> <p>自分の生活（ワークライフバランス）も大事にして、長く続けられる良い教師を目指してください</p>

<p>えません。</p> <p>勤務時間や働き方改革は異なっていると思いました。昔に比べると、良くなっているのかもしれませんが、朝早くから夜遅くまでを毎日続けると、心身共に不安になっていくことを感じました。子どもたちのために尽くすのが教員の仕事かもしれませんが、まだ慣れない部分もあるため、全然疲れがとれないと思いました。</p>	<p>今は、新型コロナウイルス感染症のため、色々できることが限られてしまいますが、大学生生活に後悔しないようにしてほしいと思います。一度きりの人生なので。小学校のボランティアは、色々な先生を見て学ぶいい機会になると思うので、もし募集などがあれば、応募してみてください。私も、小学校のボランティアはやってよかったと思う時が、今でもあります。子どもたちの関わりや先生との関わりを通して、学ぶことが多いです。</p> <p>最後に、学び続ける姿勢が大切だと思います。生徒指導の本を読んでみようかな。発達障害について勉強してみようかな。少しでも、力をつけておくといいかもしれません。初めて、教壇に立つ時の自信に繋がればいいなと思います。</p>
<p>教員は、勉強を教えて生活を指導するだけでなく、他にもたくさんの仕事があることを知った。また、その一つ一つの仕事がお金や個人情報絡んでくるため、すごく責任を感じてしまい、大変である。</p>	<p>自分は、学生時代に小学校での学習指導員をしてよかったと感じています。実際に働いている先生方をたくさん見れるため、学ぶことがたくさんありました。1年目は、わからないことが多すぎるので、あの時あの先生はこうやっていたな、と今でも経験が活かしています。</p>
<p>勤務時間以降も仕事をしていることが多い。自分自身で勤務時間を調整したり意識したりすることが必要であると感じている。</p>	<p>子どもに愛情をもって接することが大切だと感じています。また、できるのであれば、ボランティア等で学校と関わりをもち、教育現場を見る機会をもつことが実践に生かせると思うので、ぜひしてみてください。教員の動きや働き方、心構えを見たり、児童の様子を見たりすることは大変有意義だと思います。</p>
<p>学校によってその日の勤務時間は異なるが残業のない日はない。臨時的任用教員の時に勤めていた学校では、90から100時間は当たり前のようにあったり、120時間以上の時もあった。ベテランの先生でも毎日のように朝7時半に出勤し、22時、23時に退勤</p>	<p>子供が好きなので楽しくやりがいはあるが、手放しでおすすめできる職業ではないので、この職に就く場合にはしっかり考えることをお勧めします。</p>

<p>していた。働き方改革もあまり進んでいる実感はなく、早く帰るように言われるだけで、仕事の内容は特に変わりはない。残業がこれほど多いとは思わなかった。</p>	
<p>働き方改革とはいうものの、勤務時間外での勤務が当たり前のように行われている。ベテランの先生方が当たり前のように 20 時ごろまで残業をするため、若手は帰りづらい。時間外勤務に対する意識の違いが、年代や年齢によって大きくずれていると感じる。若い世代の先生方は残業に対してあまり良くないイメージを持っていると感じる。しかし、ベテランの先生方は残業を当たり前に思っている人が多いように感じる。この考え方の差を埋めることが大切だと感じる。</p>	<p>旅行やスポーツ映画鑑賞など、様々な楽しいことを経験しておくの良いと思います。私は旅行が好きで、その時の話や写真を学級の子供にすると夢中になって聞いてくれます。そのことがきっかけで子供との距離が近くなった経験があります。また、ひらがなカタカナを書き順も含めて正しく書くことも大切だと思います。特に低学年だと、板書をする時に先生が間違った書き順で書くと、子供もその書き順で覚えてしまう可能性があるからです。</p>
<p>校務分掌によっては、一人の職員に負担が偏ることもある。PC のセキュリティが強化され、良い面もあるが、効率が悪くなったり、持ち帰り仕事ができずに在校時間が増えたりなどすることもあった。</p>	<p>自分の大学時代を振り返り、もっと色々な体験や、人との交流をしておけばよかったなと思います。広い視野や多角的にもものを見るという経験は大切だと思います。</p>
<p>子どもたちにしてあげたいことがあっても、勤務時間内では仕事が終わらない。土日など勤務時間外に仕事を行うことが多かった。</p>	<p>私は、大学時代に小学校にボランティアで学習支援員のようなことをしていました。その経験は、現場に出てとても役に立っています。百聞は一見に如かずです。たくさんの経験が力になると思います。</p>
<p>子供がいるため、子育て休暇などがあり、自身の時には考えもしなかった。ライフバランスがとりやすいと感じた。</p>	<p>私は大学を出てから十数年たっていますが、大学時代にもっと時間の許す限り現場を経験する機会があれば参加すること。そして、教育にかかわること以外にも様々な経験をしてほしいと思います。</p>
<p>自分の効率が悪いので、正直まだまだ大変。</p>	<p>子どもたちと過ごすことを楽しめるのが何よりもすてきなところだと思います。ぜひ頑張ってください。</p>
<p>想像していたよりも多くの業務があった。</p>	<p>現場を見る経験をたくさん増やすといいと感じました。私自身、大学時代に実習だけでなく、研究発表を参観しに行ったり、小学校にボランティアに行ったりしました。担任とボランティア等は立場が全く違いますが、学校の状況や指導実践を全く知らな</p>

	<p>い、見たことないよりも一つでも多く引き出しやイメージがある方が確実に自分のためになると思います。私はそれらの経験から授業のヒントを得ることや、学級経営や授業で困ったときにその時の記録をもとに考えられたことが多くあります。</p>
<p>定時に帰れる日は基本的にない。本校で働き方改革の一環として行われている「ノー残業デー」については、「学校から追い出される日」のような認識であり、業務時間の削減とそこから生まれる教材研究等の時間の創出に必ずしも繋がっていない。</p>	<p>ストレス・悩みを抱えた際の相談相手と、よい意味で仕事を忘れられ、リフレッシュできる趣味を持つておくこと。</p>
<p>授業準備や教材研究をする時間がとれない。</p>	<p>私が教員を目指している時に周りの人に「忙しいから辞めた方がいい。」と何度も言われました。教員になった今も、家にいる時間より学校にいる時間の方が長く、「自分向いているのかな。」と思う毎日でした。ですが、暗い心をいつも明るくしてくれる子どもたちのおかげで乗り越えることができました。辛いことの方が多いかもしれませんが、教員になったら他の職業では味わえないやりがいを感じることができると思います。自分を信じて最後までぜひ頑張ってください！</p>
<p>いい意味で悪い意味でも、どの点から見ても全て想定内でした。受けた指導通りでした。</p>	<p>大学時代は教員に対するマイナスなイメージを抱くと思いますが、教育実習や学生ボランティア等では実感することのできない仕事のやりがいが十分にあり、むしろ自分のよさを最大限に生かせる職業だと思いますので不安に思わず教師を目指してほしいと思います。また、今大学で学んでいることが今後役に立つのか不安になることもあるかと思います。必ず仕事に役に立つ知識ですし、知っているのと知らないのでは仕事のしやすさが変わってくると思います。ただ、学生の内は現場で働いているわけではないのでなかなか難しいと感じてしまうかもしれませんが、少なくとも私はもう少し教職の勉強をしておけばよかったなと後</p>

	悔しています。しかし、教師になっても勉強する機会はいつでもありますのであきらめず自分のペースでひたむきに勉強し、日々の学級指導に大学での学びを生かしてほしいと思います。現場で働けば先輩の先生方がいくらでも相談に乗ってくださるので常に勉強になります。応援しています。がんばってください。
--	--

(5) - 2【中学校】107名の中から

表4 これから教職を目指す大学生へのメッセージ（中学校教諭から）

⑥「勤務時間や働き方改革」についての記述	大学時代に学んでおくことや体験・経験メッセージ等
勤務時間は思っていたよりも長く感じた。だが、やりがいを感じていれば感じられるほど、勤務時間は特に考えて働くことはないのだと感じる。働き方改革は、始まっているように思えたが、勤務時間などの短縮といった、目に見えるものばかりで、実際の教師の負担軽減にはつながっていないと感じた。特に、GIGAスクール構想の影響で、タブレット端末が一人一台になってから、業務負担が減った面もあるが、操作方法や新たな生徒指導案件などがあり、結果的には勤務状況は苦しくなっているようにも感じた。	病休に入った経験から、とても思うことは、しっかりと自分をさらけ出すことの大切さとヘルプを口で出すことです。私自身、今まで、色々な方々に助けていただきましたが、ほとんどは、相手から助けてもらうことがほとんどでした。わからないこと、悩んでいることがあれば、学年の先輩教員や、管理職、他学年の先生、友だち、たくさんの人に相談することが大切だと思います。社会人になって切に感じているのは、何も言わなければ事は動かないことです。周りのイメージで固められた自分自身を壊して、本当の自分自身で仕事をしてください。病休に入りましたが、この仕事は続けたいと思っています。すべてが自分の責任ではないと思いますが、自分を見つめなおす時間を作ったり、趣味に没頭する時間を作るようにしてください。
勤務時間は長く、仕事量は増えていきます。	教師は辛いことだらけですが、楽しいことに溢れた最高の仕事だと思います。
労働基準法完全無視。これから教員になる人が心配。人の善意に頼りすぎ。	大学でやっていることがあまり役に立たない。具体的にどう指導していくか？何を目当てにしてわかりやすく生徒に説明するかなど、学ぶと良い。特に体育は教科書がないので、専門外種目になると、なかなか難しい。
仕事が多く、自身の要領も悪いので勤務時間が長くなってしまう。早く帰るよう言わ	もっと、教養を身につけたり、教科の勉強をしたり、知識をつけておくべきだったと今に

<p>れるが、終わらないのに帰ることはできない。帰っても結局仕事をしなければならぬ。部活動が非常に大きな負担。</p>	<p>なって後悔しています。自分の勉強する時間をとるのは中々難しいので、時間のある大学生のうちに少しでも多く色々な知識を身につけておくと良いと思います。</p>
<p>勤務時間や働き方改革</p>	<p>教員を目指す前に、いろんな経験しておくこと。「まえはこんな仕事をしていた」とか「こんなことをがんばっていた」等の経験があると広い視野で働くことができるような気がします。実際、大学のあとすぐに教員になりましたが、まともに社会にでていない人間が急に先生になるのは生徒に申し訳ない気持ちがありましたし、もっと自分を磨いてから先生になればよかったと少し後悔があります。</p>
<p>一生懸命仕事をしている方が良いという風潮があって、ある意味予想通りだった。</p>	<p>教育現場もペーパーレスが進んでいるのでiPadやChrome bookで使える教育アプリの種類や使い方を勉強しておくとう良いと思います。</p>
<p>働き方改革が部活を削ることに向かっているため、逆に子供達のエネルギー発散場所が減りトラブルになっている。部活指導があるからこそ元気に生活している子供達の居場所が減っている。</p>	<p>子ども達は本当に素直でとても可愛いです！3年間見た子供達の卒業はとても感動的です。子ども達に対する愛情を大切に頑張ってください！</p>
<p>仕事は、校務分掌はもちろん、授業準備も含めて、突き詰めれば終わりが見えないものだということがわかりました。自分で仕事の優先順位や段取りを決め、やることを決めないと仕事が長くかかってしまうと思いました。仕事に追われてしまうこともあります。それがずっと続くわけではなく、自分の時間も確保できるのだと実感しています。</p>	<p>大学生のうちに、経験できることは何でもしておいた方が良いと思います。百聞は一見にしかず、百聞は一験にしかず、と私も大学で教わりました。経験に勝るものはないと実感しました。知識だけを蓄えていても、実際はそうでないことも多々ありました。私は大学時代にもう少し早くやっておけばよかったと思うことが沢山あります。いろいろな地域を周ること、いろいろな人達と話すこと、そして子供達と接することなど本当に数え切れません。皆さんもぜひ、行動に移してみてください。実際にその目で確かめてみてください。</p>
<p>やることがとても多く、自分のプライベートの時間を削って働かなくてはいけないときがある。しかし、その頑張った分、生徒</p>	<p>たくさんの授業を教員になる前に見たり、子供との関わり方などを学ぶためには、学習ボランティアに参加することが良い。</p>

<p>が喜んでくれて、やってよかった、と思えるのも事実ではある。勤務時間を気にしては教員はできないと思うが、教員にとって勤務時間や働き方改革というのは難しいものなのではないかと感じる。もちろんなるべく時間がかからないよう、効率よく仕事をしようとは思っているが、なかなかそうはいかないのが現実。</p>	<p>大学で学ぶことより実際に授業をしてみても学べたということをもっと実感している。採用試験に受かるまで5年間中学校で働いていたが、この5年間で授業力が少しでもあがったことは確か。臨採のときは教科に関する研修等はほとんどないため、最初の1年目は本当に苦労をした。どのように行えば良いかもわからないし、良い授業とはなにかもわからない。教員になってすぐに使える知識を身に付けるためには学校で実際に学ぶことが一番だと感じる。</p>
<p>勤務時間や働き方改革</p>	<p>私は大学時代、教員になるためにたくさん勉強してきました。もちろん採用試験の勉強もたくさんしました。しかし、今の私には大学時代に培ってきた知識や技術は、現場で使う事ができません。失敗や悩み事が初任一年目はたくさんあります。どうして自分はできないのだろうとたくさん悩みました。しかし、初任一年目を終えようとしている今、少しずつですが、大学時代に学んだことや研修等を通して学んだ事を、現場で出せるように努力しています。つまり、最初は失敗や悩み事ばかりで辛い事が多いです。しかし自然と自分に余裕が出てくると思います。比べるのは周りにいる先輩の先生方ではなくて、いつでも過去の自分と比べてください！きっと成長しています。辛くなった時は周りにいる先輩を頼りましょう！心がとても楽になります！私もこれからもっともっとがんばっていきます！一緒に頑張りましょう！</p>
<p>何度お願いしても後補充がつかず、研修にも集中できない環境。月残業100時間は当たり前。こんなに大変で改善されない環境だとは思わなかった。</p>	<p>教職だけに視野を狭めてはいけない。それは教員をお勧めしないわけではなく、いろんな考え方を知り、身につけた上で職務に当たった方が子どもたちと自分のためだと思うから。大変なことの方が圧倒的に多い仕事だが、これから生きる子どもたちの人生に一瞬でも寄り添えるということは、教員にしかできないとても光栄なことだと思う。大学生</p>

	のうちにしかできない勉強以外のことに全力投球してほしいと思います。
教員は私が想像していた以上にキツく、残業もたくさんあると思っていましたが、実際は生徒との関わりが楽しく、そこまで残業がないことがわかりました。	自分が教える教科を好きになることが大切です。その上で、特性を理解し、その教科のスペシャリストとして自信を持って教えると楽しく思えます。
勤務時間や働き方改革	<p>私は大学2年までは教員になるつもりはありませんでした。大学3年時、1年間中学校にインターンシップに行きました。そこで初めて中学生と触れ合い、それが楽しくて教員になることを決意しました。行事で喜怒哀楽を共にすること、体育の授業で一緒に運動すること、全て楽しかったです。</p> <p>いま、教員になってよかったなと思っています。正直言って、担任業務、毎日の教材研究、自分の担当する校務分掌、行事担当になれば行事の計画など、仕事は無限にあって大変です。でもやりがいはすごくあります。担任しているとムカつくこともあります、なんだかんだみんな可愛くて、教員になってよかったなと思う瞬間もたくさんあります。授業も下手くそだし、学級経営もこれでできているのか分からないし、1日を終えるのに必死ですが、ワンクールしたら要領つかめるのかなと思っています。要領つかむまでは大変なことの方が多そうですが、自分のスタイル見つけられるまで頑張りたいと思っています。</p> <p>今は、とりあえず大学生生活楽しんでください(笑) ゆっくりできるのは今だけです。ただ、教科の知識については勉強しておくべきだと思います。</p> <p>あとのことは現場で学んでいくものです。現場に勝るものはありません。</p> <p>好きな仕事をするって素敵な人生だなんて思います。夢を見つけてください。現場でまっています!!!</p>
勤務時間や働き方改革: 学生時代は教員は、「子供のために何でもやるのが当たり前!」というイメージを持っていました。	<p>①専門性の向上(基本です。日々しっかり研鑽を積みましょう。)</p> <p>②コミュニケーション力の向上(学生時代に</p>

<p>なのでサービス残業当たり前で毎日夜の8～9時は当たり前、土日も部活動で休みなしというイメージを持っていました。しかし教員に正式採用されてから働き方改革、超過勤務原則月45時間以内、部活動ガイドラインの遵守など少しずつ教員が健康で安全な働き方になっているなど感じたことです。</p>	<p>バイト、サークルや研究などの課外活動をして、いろんな人とのコミュニケーションを取る機会、協力して何かを成し遂げる機会を意識的に作ってください。(自然とコミュニケーション力は向上していきます。)</p>
<p>勤務時間や働き方改革が内側からは何もなされていないことを改めて知りました。部活動は顧問の先生方によって具合が違ふと思います。部活は大切だと思いますが、教師が土日をつぶしてまで行うことではないと思います。どうか、若い先生が困らない部活動のあり方が広がっていけばな、と思います。</p>	<p>大学時代には、生徒に話せるような多様な経験をすることが大切なのかな、と思っています。そこから、視点がどのように変わったのかなど分析して、生徒に話すネタとして用意しておく、授業の余った時間、朝の会の時間、集会での話し、学級通信などさまざまなところで活用できると思います。大きなことではなくていいと思います。国内旅行をする、お笑いライブに見に行く、音楽ライブを見に行く、生徒の視点が広がる、大学生で学べることをたくさんした方がいいと思います。あと、人に優しくなれると、生きやすくなります。</p>
<p>元々教員になることが夢で調べていたのである程度の実態は知っているつもりでしたが、思っているよりも勤務時間外の仕事が多い印象があります。また、仕方ないことなのだと思いますが、人によって仕事の負担が違ふこともあります。働き方改革を行っているとはいえ、仕事の量が減らないため、早く帰宅しても後が大変になるということもあり、勤務時間や働き方改革については予想を上回るほど難しい問題でした。仕事の時間を削るのではなく、人件費等難しい問題はあると思いますが、教員の人数を増やすことができれば少し変わるのではないかと思います。</p>	<p>教育関係についての学びはもちろんのことですが、趣味や興味のあることに挑戦する時間をしっかりと作ってください。生徒や教員とのコミュニケーションを取るためにもやはり色々な経験をしておくことが大切です。私は美術の教員なのですが、スポーツが好きで小さいころから行っていたため、そこから子ども達と繋がりができたり、運動している人の絵を描きたい生徒に細かいアドバイスをすることができました。その他にも「趣味で行っていたことの経験が活かされた」と思う時があれば、「もっとこういうことを経験しておけばよかった」と思う瞬間が多々あります。経験を積むということは自分の力にもなります。教員になるとなかなかそういった時間を作ることが難しくなりますので、ぜひ今は外をみて色々なことに挑戦してみてください。</p>

5. 調査結果の考察

令和3年度埼玉県公立小中学校初任者研修の初回と最終回のアンケート意識調査を実施しての結果から特徴的なことを拾い出してみたい。今回の研究の主たるテーマは「教職イメージ」に焦点を当て、初任者という本採用教員としての教職生活のスタートを切った最初の1年間の教職経験を通して、教職に就く以前の学生時代における教職という職業のイメージと、実際に教職に就いて1年間を経た初任者の段階での教職という職業のイメージに対する相違や変化をとらえることであるが、考察するにあたって留意しなければならないことは、意識調査のアンケートサンプル数が初回（回答数274名（回答率28.5%））と最終回（回答数643名（回答率66.9%））でかなり差があることである。特に、初回次の回答者が研修会参加者の28.5%の数であることから、それぞれの研修会に回答を得た同じ設問について有意な結果であるというには難しい面がある。これは初回がオンデマンドによる研修会であり、各自がオンデマンド視聴後に回答したことに対して、最終回は集合対面研修で、アンケートへの協力についての情報が研修会場で扱われたという研修会の実施形式が異なる面での影響を考慮する必要があると考えられる。

そこで、この結果考察で同じような設問と選択項目（「不安に思っていることを3つ選んでください」）について初回時と最終回時での回答で比較考察する場合、回答率の差を無視した条件での考察であることを述べておく。

5-1 初回時「教員としてスタートしたが、次の項目で特に強く不安に思っていることを3つ選んでください。」と最終回「初任者研修の修了時を迎え、約1年間を経た現在も、次の項目中で不安に思っていることを3つ選んでください。」の回答について

この設問についての回答で、初回時に抱いた不安は、比率の多い項目からあげると、

「教科指導や授業指導での指導方法や子供への対応」	141名（51.5%）
「保護者との人間関係（コミュニケーション）や連携」	137名（50.0%）
「学級経営や学級指導」	131名（47.8%）

であり、最終回での回答の多い項目をあげると

「学級経営や学級指導」	353名（54.9%）
「道徳や特別活動などといった領域の指導」	315名（49.0%）
「教科指導や授業指導での指導方法や子供への対応」	311名（48.4%）

となっており、初回時に約半数の者が選んだ「保護者との人間関係（コミュニケーション）や連携」は最終回では246名（38.3%）となって減少した。このほか初回次と比較して減少率が高かったのは、

「児童生徒との人間関係（コミュニケーション）の構築」と「先輩教員や同僚教員との人間関係（コミュニケーション）の構築」であった。逆に、初回次に比較して増加率が高かったのは、「道徳や特別活動などといった領域の指導」（20.4%→49.0%）と「不登校、非行問題行動等の生徒指導上の課題への対応」277名（20.4%→43.1%）である。

以上のことから、初任者は教員（本採用教員）として1年の勤務経験を送ることで、授業や教科といった学習活動、そして、生徒指導や教育相談といった教育活動など、初任者としてのスタート時に抱いていた漠然とした不安から、「道徳」や「特別指導」などの具体的な領域についての不安をあげていることから教育公務員としてのより教育実践活動の中での具体的な不安が見え

てきたのではないかと考えられる。また、「学級経営や学級指導」の比率が高まっていることは、子どもたちとの生活での関りがより濃密になってきたことが推察される。逆に、保護者との人間関係（コミュニケーション）や連携への不安は実際に保護者との活動や対応を通して、教員以前に抱いてイメージとはとなる形で意識されてきたのではないかと考えられる。

5-2 実際に教員になってみて、大学時代に予想（イメージ）していた教員像や学校像のうち次にあげる項目で実際には大きく異なっていた点があれば指摘してください。（①子どもたちとの関係 ②教員同士の関係 ③保護者との関係 ④地域との関係 ⑤生活の安定 ⑥勤務時間や働き方改革 ⑦その他）について

この設問については、圧倒的に「⑥勤務時間や働き方改革」を選択した者が多く、勤務時間や働き方改革への関心の高さを伺うことができる。現在、学校の働き方改革が議論されており、国をはじめとして、各地方自治体でも教員の働き方を改革、改善していく取り組みが各方面で行われている。

記述内容については、若干の回答として働き方改革が思っていた以上に進んでいることを指摘するものもいるが、9割を超える回答数、記述数で厳しい学校現場の状況や自身の置かれた勤務状況の改善を訴えるものが多い。

ただ、数人の回答者が指摘しているが、「教員」という身分は、子どもたちや保護者から見れば初任者もベテランも同じことを要求される仕事であることが多く、経験を経るにしたがって、見通しが持ててきたり、経験を通じての子どもや保護者への対応にも慣れてくることもあながち否定できない。

役職や職階などのヒエラルヒーにもなまって、仕事の質や責任の異なる行政職や民間企業とは質の違う職業であることには留意しておく必要がある。

これらの初任者の思いを学校現場はどの程度汲み取っているのだろうか。もちろん、国や自治体の行政においても有効な施策を打ち出さないままに、学校現場に任せている状況にあるなら改善が進まないことは論を待たない。一方で、学校規模や地域の文化や伝統的な社会土壌が異なる各学校には各学校の実態に差があり、その実態に応じた改善改革をトップダウンとともに教員相互のボトムアップでの取り組みを始めなければ解決は遠のくばかりである。この初任者の声に行政も管理職もそして、一般の教員、さらには保護者、地域住民が聞き耳をもって連携したいものである。

5-3 これから教員を目指す大学生に、大学時代に学んでおくことや体験・経験を書いてください。（メッセージでも構いません）

この設問について、まず驚いたのは回答を寄せてアンケートに協力してくれた参加者全員が何らかの記述をしていることである。回答数 643 名（回答率 66.9%）

主な記述内容は、既に「5」で「⑥勤務時間や働き方改革」との関りから、実際に負担感や長時間労働を記述し、訴えた者がどのようなメッセージ等を取り上げたのかを中心に拾い出してみた。

この「⑥勤務時間や働き方改革」で現状の過酷さや矛盾を指摘し、訴えた者たちが今後教職を目指す大学生たちにどのようなメッセージを届けたのかについては、今後、教員養成を担う大学教育には多くの示唆とヒントがあると感じた。つまり、過酷な教育現場の労働環境で働いている

にも拘わらず、教職そのものについては充実したやりがいのある職場としてとらえている傾向が強いのである。例えば、

「私は大学2年までは教員になるつもりはありませんでした。大学3年時、1年間中学校にインターンシップに行きました。そこで初めて中学生と触れ合い、それが楽しくて教員になることを決意しました。行事で喜怒哀楽を共にすること、体育の授業で一緒に運動すること、全て楽しかったです。

いま、教員になってよかったなと思っています。正直言って、担任業務、毎日の教材研究、自分の担当する校務分掌、行事担当になれば行事の計画など、仕事は無限にあって大変です。でもやりがいはすごくあります。担任しているとムカつくこともあります。なんだかんだみんな可愛くて、教員になってよかったなと思う瞬間もたくさんあります。授業も下手くそだし、学級経営もこれでできているのか分からないし、1日を終えるのに必死ですが、ワンクールしたら要領つかめるのかなと思っています。要領つかむまでは大変なことの方が多そうですが、自分のスタイル見つけられるまで頑張りたいと思っています。

今は、とりあえず大学生活楽しんでください（笑）ゆっくりできるのは今だけです。ただ、教科の知識については勉強しておくべきだと思います。あとのことは現場で学んでいくものです。現場に勝るものはありません。好きな仕事をするって素敵な人生だなんて思います。夢を見つけてください。現場でまっています！！」

という記述があり、この初任者の思いを大学の教員養成を担う大学関係者、教員はどのように受け止めていく必要があるのだろうか。あるいは、教員採用を担っている国や地方公共団体はどう活かしていくべきなのだろうか。さらに、

「私が教員を目指している時に周りの人に『忙しいから辞めた方がいい。』と何度も言われました。教員になった今も、家にいる時間より学校にいる時間の方が長く、『自分向いているのかな。』と思う毎日でした。ですが、暗い心をいつも明るくしてくれる子どもたちのおかげで乗り越えることができました。辛いことの方が多いかもしれませんが、教員になったら他の職業では味わえないやりがいを感じることができると思います。自分を信じて最後までぜひ頑張してほしいです！」

と答える初任者に、同じ学校現場で教職に就いている者、教育施策、教育行政に携わる指導者、そして、教員とともに子どもたちの教育を担う保護者はどのような対応をしていくべきなのだろうか。

6. 終わりに（今後の展望）

それにしても、ここ数年の教員志望者の減少は人材確保の観点から危機的な状況がさらに深刻になりつつある。国単位でも、令和2年度実施の教員採用試験で採用された令和3年度の教員の競争倍率は小学校2.6倍、中学校4.4倍、高等学校6.6倍で、前年度に比較して増加したのは高等学校だけである。

このことについて文科省⁽⁴⁾では、「採用倍率が過去最高の12.5倍であった平成12年度においては採用者数が3,683人だが、令和3年度には採用者数が16,440人と5倍近くに増えた。結果として、採用倍率が2.6倍まで低下している。中長期的なトレンドでは、採用者数が平成12年度以降ほぼ一貫して増加しており、近年の採用倍率低下は、大量退職等に伴う採用者数の増加の寄

与するところが大きい。」

と指摘している。確かに需要と供給のバランスがうまく取れていないこともあるだろうが、初任者たちが訴える教職の職場環境の整備についての議論がさらに高まっていかねば、本当に意味で教職の路を選択する若者は増えていかないのではないかと考える。逆を言えば、この研究でも取り上げた通り、厳しい職場環境にあっても教職そのものにとらえ方は肯定的であって、むしろ生きがいややりがいのある職場だと彼らは訴えている。

教員が対象とする子供たちは、未来社会を切り開いていく人材であり、我々国民の共通の財産である。その子供たちの教育を担う各学校の教員たちの労働環境を整備していくこと、そして崇高な職である教職を担う後継者を育成する大学教育を充実したものとすることは急務である。このために、国も自治体も、各学校教員も、そして、保護者、地域もそれぞれのフィールドで教育について再考し、連携し、改革に取り組む時なのではないだろうか。

謝辞

今回の研究にあたっては県教育委員会の初任者研修担当の各関係者、特に、埼玉県総合教育センターでの教職員研修担当の吉田佳恭をはじめ、教育センターの皆様には多大なご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

参考文献等

- (1)・「教員養成の手がかりを求めて」～平成 29 年度埼玉県小・中学校初任者へのアンケート調査から～
埼玉大学紀要 教育学部 67 (2) : 189-210 項 (2018)
- ・「教員養成の手がかりを求めて II」～平成 30 年度埼玉県小・中学校初任者へのアンケート調査から～
埼玉大学紀要 教育学部 68 (2) : 217-245 項 (2019)
- ・「教員養成の手がかりを求めて III」～平成 30 年度埼玉県小・中学校初任者へのアンケート調査から～
埼玉大学紀要 教育学部 69 (2) : 67-82 (2020)

(2) (初任者研修)

第二十三条 公立の小学校等の教諭等の任命権者は、当該教諭等（臨時的に任用された者その他の政令で定める者を除く。）に対して、その採用（現に教諭等の職以外の職に任命されている者を教諭等の職に任命する場合を含む。附則第五条第一項において同じ。）の日から一年間の教諭又は保育教諭の職務の遂行に必要な事項に関する実践的な研修（以下「初任者研修」という。）を実施しなければならない。

- (3) 「国立の教員養成大学・学部及び国私立の教職大学院の令和 3 年 3 月卒業者及び修了者の就職状況等について」調査結果令和 3 年 3 月 31 日

- (4) 令和 3 年度（令和 2 年度実施）公立学校教員採用選考試験の実施ポイント

令和 4 年 1 月 31 日公表

「小学校について、直近の令和 3 年度と令和 2 年度を比較すると、退職者数が平成 28 年度末をピークに減少していること等により採用者数は令和元年度より減少しているが、近年の大量採用により既卒者の受験者数が減少したこと等をうけて受験者数が減少したため、採用倍率は引き続き低下している。また、小学校について、受験者数の内訳を分析してみると、新規

学卒者は小幅な増加 となった一方、既卒者は引き続き大きく減少している。このことを踏まえれば、小学校における受験者数の減少傾向は、臨時的任用教員や非常勤講師などを続けながら教員採用選考試験に再チャレンジしてきた層が正規採用されることにより既卒の受験者が減ってきていることなどが理由であると考えられる。一方、中学校や高等学校については、全体として4.4倍、6.6倍の採用倍率を保っているものの、既卒者の受験者数の減少に加え、中学校においては直近5年間で新規学卒者の受験者数の減少が見られている。中学校や高等学校の受験者数の減少原因を一概に断定することは困難であるが、小学校に比して民間の採用状況に左右されやすく、新規学卒者の減少傾向に歯止めをかけることが必要になっている」

(2022年3月31日提出)

(2022年5月7日受理)